

# 門人と交友関係から見た蟹養齋

白井 順

## 一、はじめに

近年、蟹養齋の著作に関しては『家礼』や『小学』あるいは律呂など、その思想を中心にした論考が発表されている。例えば高木靖文が教育制度について<sup>1</sup>、また高橋恭寛が『小学』教育に関して<sup>2</sup>、また律呂方面では榎木亨が<sup>3</sup>、そして松川雅信が『家礼』や『居家大事記』<sup>4</sup>といった蟹養齋の著作を扱っている。そもそも蟹養齋の著作が今に伝えられたのは、中村習齋ら門人たちが写本を転写し蒐集したことによるもので、中村得齋によるその成果が『道学資講』である。その後を継いだのが細野要齋であり、永井季哲（以保）である。細野や永井は尾張のみならず桑名の秋山断や九州の楠本碩水などと交流し、蟹養齋の著作の筆写を助け、筆写による伝承を重んじた閩齋派の血脈を繋いだ。他にも名古屋出身の服部拱（悔庵）が蟹養齋の著作を蒐集し、また秋山罷齋の門人である舞田敦・吉田英厚らによって明治の崎門文献の保護と顕彰が行われた。そして『日本儒林叢書』にも蟹の代表作『非徠学』が翻刻され収録された。戦後、市橋鐸らの努力により『蟹養齋年譜』が作成されたが、翻刻された蟹養齋の著作以外はほぼ筆写本であるため、蟹養齋という人物が広く知られているとは言い難い。

筆者は、細野要齋が蒐集した筆写本を所蔵する蓬左文庫や鶴舞中央図書館、桑名市立図書館秋山文庫、大倉山精

神文化研究所服部富三郎文庫などを調査する中で、蟹養斎という人物像の再考を迫られるに至った。それは従来、闇斎派という枠組みの中でしか蟹養斎という人物を見てこなかったため、闇斎派の学統を示した『崎門淵源録』は勿論、『尾張名家誌』『名古屋市史』や『三重先賢伝』など蟹養斎の伝を載せているものの、彼の交友については具體的な言及がないからである。本稿で初めて指摘することであるが、蟹は吉見幸和・谷川士清・龍崎致斎・南川維遷らと交友があった。蟹養斎は尾張を去った後、桑名や大坂を転々とすることになるが、自分の私塾を持たない蟹養斎の学問はどのように伝えられていたのか、門人たちとの関係はどのようであったのか、彼の著作はどのように読まれていたのか、本稿はそのような視点から蟹養斎像の考察を試みるものである。

蟹養斎はどういう位置づけなのかということがまず問われねばならない。闇斎没後、闇斎の学問は神道系と朱子学系に分裂した。崎門三傑と呼ばれる佐藤直方・浅見綱斎・三宅尚斎が朱子学系を引き継ぐものの、浅見綱斎は正徳元年（一七一二）に、佐藤直方は享保四年（二七一九）に没すると、門人たちは違う学派へ転向したり地方へ行ったり、一系相伝の闇斎学派の形態が維持できなくなっていく。享保十年（一七二五）養斎が上京した当時、京都では新しい学問は伊藤東涯が率いる仁斎学であった。崎門三傑では三宅尚斎（六十四歳）のみ存命で、既に時代遅れ感があった。尾張藩は徳川義直の時代から、陳元贊や張振甫などの明の遺民を受け入れており、特に尾張藩では華語に秀でた徂徠派の木下蘭皐と朝比奈玄洲が朝鮮通信使の応対にあたり高い評判を得ていた。蟹養斎は少年期を徳川継友治世下の尾張で過ごし、享保十五年（一七三〇）十一月二十七日に継友が没し、弟の宗春が尾張藩を継ぐが、宗春が好んだのはやはり徂徠学であった。徂徠はすでに逝去していたが、彼が起こした波は大きく反徂徠という形で色々な方面から反響がある時代に突入していた。例えば、細井平洲や井上金峨・片山兼山など折衷派の主張などが挙げられ、ほかに蟹養斎が活動した地でいえば、大坂の懷徳堂も反徂徠の立場である。蟹の代表作『非徂

徠学』は『論語徴』の解釈において問題のある箇所を三八条に亘って記し、この作品は蟹養齋の崎門学者としての学問を象徴するものであるが、同時に彼の学問が崎門の枠組みの中から抜け出せなかったことを示している。『非徠学』が刊行されたのは明和二年（一七六五）であるが、これは以前より「非新学」というタイトルで門下が筆写していたものを改訂し出版したものである。

享保末年に尾張に戻り、半公半私の巾下学問所を始め、尾張崎門の開祖とされる養齋ではあったが、実は教場を奪われ十年足らずで去ることになり、桑名・京都・阿波・大坂と転々として、再び尾張に戻って教鞭を執ることはなかった。

蟹が主に活動した京都・尾張・伊勢は、吉見幸和・谷川士清・多田義俊といった影響力の強い国学者が活躍し、神道文献を考証的に分析し、儒書からの援用を明らかにして新しい国学の波を起こしていた。国学の台頭とともに、吉見幸和や多田義俊のように閩齋学を学びながらも批判するものが現れ、蟹養齋の高足・磯野員純も神道へ転向するなど、閩齋派の学問を通して国学へ流れる傾向があった。須賀精齋の門からも尾張垂加神道の堀尾秀齋（一七一四～一七九四）<sup>6</sup>が出ている。そして尾張儒学では、徠学者・秦峨眉や深田慎齋、そして古学派を代表する松平君山そして折衷派として叢桂社を開いた中西淡淵などが活躍し、雨後の筍の様相を呈していた。蟹養齋の亡きあと、安永年間には徳川宗睦が改革を進め、中西淡淵の門人・細井平洲が尾張藩校明倫堂の督学として尾張の学問を担うようになる。そして蟹の著作は中村習齋以後、中村厚齋・直齋父子そして直齋の子・得齋（『道学資講』を纏めた）から間島正種・深田正韶・近藤主静と伝わり、細野要齋に受け継がれることになった。

## 二、入門から独立まで

### ① 易と朱子語類研究

享保四年（一七一九）、十五歳の時に養齋は通称を佐左衛門と称した。享保七年（一七二二）に刊行された『蓬左詩帰』には「布施芳沢 字磋左衛門」とあり、当時養齋はまだ十八歳である。彼は「城南書事」と題し、「覇業未だ垂れず卒土の浜 若し文事無くんば民を安ずること奈せん 憐むべし碌碌たる俠遊子 長劍撫し来て自ら人に傲ることを」と詠んでいる。同書には宮崎古厓（当時三十六歳）の「知者不知也説義節」という儒学解釈詩も掲載されている。宮崎古厓の息子・宮崎筠圃（一七二七〜一七七四）も伊藤東涯・伊藤蘭嶠に入門し、ほぼ同じ時期に京都で暮らし養齋と交流があった。享保十年（一七二五）、乙巳、二十一歳の時、漢詩人・布施芳沢（養齋）は閩齋派三宅尚齋の門を叩いた。養齋の著作『経解兼取諸家論』には自ら「七歳自ら書を読むに朱解を以て主と為す」と言い、幼少期から朱子学に接していた。

養齋は五十三歳（宝暦七年）の時に『周易本義疏』の序文を記して「予 少きより周易僻有り。弱冠にして尚齋先生 山崎子の統を承くを聞き、笈を負いて西遊し、業を其の門に受け、経伝子史 徧く聞かざるは莫し。而れども周易一部 最も力を励まして以て聞く」と言う。「山崎子の統を承くを聞き」とあるように、養齋は自ら望んで閩齋派の門を叩き、『周易』を好んでいた。また「維安 少きとき尾州に在り、平安に西遊して、業を先師に受く。然れども生質 頑鈍、加うるに軽浮を以てす。且つ此の時 専ら易象範数の学を好み、性命の説に於いては則ち未だ能く心を専らにせず」と言い、入門当初は性説方面への関心は薄かった。蟹の易学関連の著作は多く、中村習齋

によれば、ほとんど尚齋の下で学んだ時期の作品である。享保一四年（一七二九）二五歳の時、天野信景の『周易著木図解』跋を書いており、このことから蟹養齋が易を得意としていたことが分かる。

養齋は『周易』以外に、入門直後から『朱子語類』研究を始めていた。蓬左文庫『語類考異』（神宮文庫の書名は『朱子語類異字考』）によれば、「享保十年丙午秋、恭庵柳川氏より唐本朱氏語類を得。」と記し、柳川恭庵の唐本語類を見た後養齋はすぐに校勘を開始した。大倉精神文化研究所蔵『朱子語類雜出目』には細野要齋の筆で「右語類雜出他部目 蟹養齋先生親墨本を以て之を写す 親墨本は中村氏蔵」とあり、『朱子語類』の校勘をしていたことが他の資料からも裏付けられる。例えば、秋山文庫所蔵『続崎門経義輯編』の「朱子語類卷二五 蓋亦非集注正意」とする記録に「享保十六年辛亥十月八日尾張布施氏説先生吟味にて出之」とあり、養齋は入門まもなく『朱子語類』を研究していたことが窺える。

## ② 楽律研究

享保十六年（一七三二）に『制律捷法』（『道学資講』卷二四二）という律呂に関する書を著わし、尚齋の命を受け、蟹養齋は齋藤信齋に会い楽律の研究に取り掛かる。蟹が著わした『楽学指要』の序文には次のように言う。

…幸いに中村惕齋この学に志し古尺を考え古章を推しまことに蔡氏以来の一人にして日本生民あつてよりいまだこれあらじ。吾山崎先生もとよりここに志ありといえどもいままたここにいとまあらず其伝を得たるものは齋藤信齋なり。わが師尚齋先生吾党の楽に志すものなきを憂へて予に命じて其伝を得せしむ。予信齋にまみえ古楽の興すべき機と楽を講ぜんずんばあるべからざるを悟れり。予未だ信齋をみざるに予めて一卷を作り為に律呂提要と云う。後信齋にまみえて再びこれを見るに其あやまちあり。未だ全然ならず、よつて其篇をとり又これを正し小子に示しその始めに書すること如此と云

右にいう齋藤信齋は中村惕齋の門人で、惕齋の『律呂新書』の研究を進め『修正律呂新書』の跋文を記した人物である。中村惕齋死後、増田立軒（一六六四～一七四三）がその後を継ぎ、惕齋の著作を刊行していた。中村習齋は『一軌資講』（『道学資講』巻五之四）「律呂新書 二冊和版梓行」の条で「華本は性理大全廿二三卷に載て表章別板に行わる二板あり。一は中村惕齋の本、一は天木善六表章なりと云」と明記し、次のように指摘する。

山崎先生大和小学に於て古楽を継ぎけりとのたまふ者これなり。尤深く心を尽くすべき書なり。蕃この書を反覆すること四十余年その究極至りて未だ理解し得ざる者あり。…この書、元禄丁丑（十年秋九月）の跋文、藤成子修と云は、惕齋門人齋藤莊兵衛（京師の絲買鼠屋と号）登梓の本なり。蕃この一部を先師に得て家藏す、時に師家、この本数部あり、從遊の士に分ちあたへて曰く、これ天木善六梓に鈔むる所なりと、今この時世を考るに、元禄丁丑の頃は、天木甚だ幼なり、この事をなすべきに非ず、蓋し跋文成て後数年、登梓するか、抑天木再刻せしむるか、姑く疑う所を記すと云。

天木時中は元文元年（一七三六）九月十六日に四十一歳の若さで亡くなる。中村習齋の指摘のとおり、天木は元禄十年（一六九七）にはわずか一歳で、跋文は天木ではなく齋藤信齋であることは明らかで、蟹養齋が分け与えたものは齋藤信齋の『修正律呂新書』であり、蟹養齋の人間性を伝える逸話として面白い。一方蟹が記した『読律呂新書記』について中村習齋は「幼蒙の為にする者なり」と述べ、続けて「先師の本といえへども未成の物なり具眼の士これを一洗せば好書とならん」と評している。尚齋が楽律の勉強を命じたのは蟹養齋一人ではなく、養齋と同郷の門人・山本尚于は『律呂新書筆記』（『道学資講』巻二五一所収）を記している。山本尚于（伊勢櫛田の人、源仲、養蘭堂）は香川修庵（太仲）の弟子で医者であり、尚齋門下の友人でもある。更に蟹養齋の次男・冬藏（貞、幼名桃次郎、のちに筱宗介と称す）は楽律に詳しかったと言われるが、推測ではあるが養齋の影響によるものと思

われる。養齋の弟子中村習齋『吾郷』「唐樂明樂」の条に次のようにある。

唐樂吾邦に伝ふること久し尾州に在りては享保以前は東照宮樂士の外に伝ふる者甚だまれにして士人のもてあそびとなることなし。享保の末元文の始にいたりて吾師これを京に伝え來り其他佐枝雷門浮屠本源院等其友としてともに人にこの道をおしえて後人に多くもてあそぶことを得たり。これより前はこれを学ぶに甚だ容易ならず故をもて汎くしるもの希之。近來尾州の士庶学ぶことの易きはひとえに吾師と雷門の功也。

蟹養齋と佐枝玄通（雷門）らによつて尾張に明樂がもたらされたという。京都で活躍した明樂家・魏皓の『魏氏樂譜』の巻頭と巻末には、竜草廬（一七一五～一七九二）、宮崎筠圃（二七一七～一七七四）、書家の関世美（一七一八～一七八三）、そして竜草廬の弟子で漢詩人の岡崎廬門（一七三四～一七八七）の序跋があり、筠圃、世美、廬門は魏皓から明樂の指導を受けた人物である。享保十九年（一七三四）春に養齋が書いた「送宮順平序」には「古厓宮先生、予と同里、嘗て家族を携え、居を京に移し、既にして歸る。今茲の春又た京に移る。皆義の在る有りとして云う、君子人か、君子人なり、と」と言う。順平とは宮崎筠圃（諱淳・奇、字子常、通名常之進）のことである。これは蟹養齋が明樂を尾張にもたらした証左である。また蟹養齋には猿樂家を批判した『猿瞽問答』という著作があり、これは久席が唐樂を学ぶことの付録として作られたものであるが、これも蟹養齋が唐樂に詳しくたことを伝えている。『小川晋齋雜話』に「蟹先生に音楽のことについて阿州侯より称待せられたれば先生云、今度阿州へ行く」とある。蟹は律呂関係の講義で招聘をうけ、京都を去る。阿波での事跡は不明であるが、高知城歴史博物館山内文庫には蟹の『読律呂新書記』がある。他にも『日本樂説』という著作もある<sup>10</sup>。

### 三、門人たち

#### ① 磯野員純

享保甲寅十九年（一七三四年、養齋三十歳）に蟹養齋は尾張に戻ってきた。崎門では浅見門下の小出侗齋（一六六六～一七三八）がいて、先に挙げた『蓬左詩帰』の編者・千村夢澤も小出侗齋の門人である。小出侗齋は尾張の出身で、浅見の大義名分論を受け継ぎ、『靖献遺言講義』、『忠士筆記』などを著した。名古屋の桑名町で私塾を開いており、小出侗齋の門人・須賀精齋（一六八八～一七五四）が多くの門人を擁していた。養齋が尾張に戻るまで、閩齋派といえ小出侗齋であった。蟹養齋の高弟・中村習齋（一七一九～一七九九）と同時期に名古屋で活躍した堀尾春芳（秀齋、観瀾翁、一七一三～一七九四）は尾張垂加神道を代表する人物であるが、中村習齋・堀尾秀齋ともにはじめは侗齋の門人・須賀精齋に学んだ。習齋だけは蟹の講義を聞いて養齋の門人となり、堀尾春芳は須賀より儒学を学ぶ（小出侗齋が須賀から学ぶよう命じた）<sup>11</sup>。一方で、須賀は名古屋東照宮の祠官・吉見幸和に垂加神道を学んだ<sup>11</sup>。

元文元年（一七三六）、吉見幸和は神典の主たるものであった伊勢の神道五部書が偽書であると文献学的に批判した「五部書説弁」を著わし、吉見神道を展開し始めた。当時、吉見幸和は五十三歳、須賀精齋は四十七歳、堀尾春芳は二十三歳、蟹養齋は三十二歳である。蟹養齋も吉見幸和と交流があり、「贈吉見氏」と題し「上國して曾て欽う風水翁、萱堂の遺詠更に壮雄、古人の胎教は青史に在り、今日深く母訓の功を知る<sup>12</sup>」（注に「読筑紫帯」とある）と詠んでいる。『筑紫帯』とは吉見幸和の母・吉見蓮子の作品で、小倉藩士の娘であった蓮子が吉見家に嫁

ぐ際の小倉く名古屋までの旅行記である。もう一首、恭水三書を詠んで「王綱紐を解いて幾たびか年を経、竺教（仏教）風 上天を蔑みす、喜びに堪う恭翁は今瞿鑠、習俗を一滴して篇を成す有り<sup>13</sup>」とあり、「翁今瞿鑠」という表現に旧知の親しさを感じさせる。

蟹養斎の高弟・磯野員純（渙斎、？～一七七四）は吉見幸和（風水翁、恭軒先生）の弟子となり、学問トレントは確実に国学に移っていた。吉見幸和の『恭軒先生事状』には磯野の著述として「無戸室弁」「国初恭伯弁」「延享二年上京記」挙げられている<sup>14</sup>。延享四年（一七四七年、丁卯）に磯野は勝手番となり、俸三石を加えられたが、蟹養斎の文集に「志は須らく大なるべきも、誤りて験を求むるを以て志と為すこと勿れ、勤は須らく勵なるべきも、誤りて速かならんと欲するを以て勤と為すこと勿れ、須らく朱子の学を為すべきも、磯野氏の学を為す勿れ、丁卯首夏念八夜に書し以て磯野生に授く」とある。この年に磯野は蟹のもとを離れたらしく、蟹養斎が神道に流れる弟子たちを崎門の学問に留めておけなかった様子が窺える。

蟹は三重の洞津の医師・谷川士清（屋号は恒徳堂）とも交流があった。養斎の文集には「送谷川生帰省郷里」という詩が見え、京都時代から面識があったようで、晩年には「彼の勢（伊勢のこと）山を瞻るに、恒徳先生の寿を賀する也、先生は洞津に居て軒岐の家（医家、医業）を為す、皇天は其の済民の功を福（祝福）し、子孫斯に昌ゆ矣<sup>15</sup>」と医者でもあった谷川士清の長寿を詠んでいる。桑名市立図書館秋山文庫所蔵『火葬弁』の奥書には「己丑 十二月三日 洞津谷川鳳 謹写、庚辰正月十五日 坂氏方明 欽写之」（己丑は一七六九年）とあり、筆跡は谷川氏ではないけれども、彼の写本を写しており、これも交友の証左と言えよう。

## ② 吉田恭斎

確認しうる蟹養斎の最初の門人は吉田嘉幹（恭斎）である。吉田嘉幹は通称三郎左衛門、尾張の人で、尾張藩鷹

匠の倅である。吉田恭齋は蟹養齋に関する著述（『道学資講』所収「諸先生語録」）を残し、中村得齋に伝えた尾張崎門の功労者といふべき存在である。『寛延記草』によれば、吉田が久席上坐の筆頭を務めていている。また「久学饗会」では吉田が自警文を記し、「先生嘉幹に謂いて曰く、門下久学の徒、読書は或いは間断無きと雖ども…嘉幹敢えて昧陋を以て自棄せず、先生の教を奉ずること二十余年、此においてす。」<sup>16</sup>と言ひ、蟹が尚齋の培根達支堂で教鞭を執る以前（享保十三年頃、一七二八年）から既に門人であつたことがわかる。

蟹は京都から尾張に戻り、元文元年（一七三六）に私塾・観善堂は落成するが、もとより盛況というわけでは全くなく、当初は二三の門人しかいなかった。元文三年（一七三八）蟹養齋は吉田嘉幹に恭齋といふ齋号を与え「恭齋記」を記し、「吾が張州に吾に与する同志なる者幾人ぞや、斯文の興るや是の州に於いてする也」と言う。養齋は吉田に、朱子学が伝わらず礼儀のない尾張を変えようと言つて教学を勧めている。名古屋市立博物館所蔵『恭齋吉田先生雜記』には「巳未歳四月東溟先生作」として「野に餓孳有り悲しみに堪う可し、廐に肥馬無きも亦た何ぞ補わん、但だ聞く露今將に降らんとす、惟れ期す涸轍の苦しみを救うに速ばんことを」（元文四年巳未歳、一七三九）と記録し、側で付き従つていたことが窺える。『寛延記草』によれば、巾下明倫堂で吉田は既に自分の門人を取り、助教（堂主を助け、代講をし会読の主となる）となり、『孟子』を堂主に代わつて代講していただいでなく、容儀（座作進退・戸障子開閉・配膳などの作法やマナー）を司つていた。

養齋の門下では、喪祭のみならず朱熹への積奠祭祀も行つていた。『吉田恭齋先生雜記』には次の様にある。

宋光宗慶元六年庚申三月甲子（九日也）朱子卒す、本朝後土御門院正治二年に当る。享保二十一年丙辰、五百三十七年を距つる也。又た元文五年庚申歳、五百四十一年を距つ。又明和四年丁亥、五百六十八年を距つ。

祭主 吉田三郎佐衛門 賛 青木與左衛門 東分奠 水野新七 賛 田代鍋三郎 西分奠 横井万助 賛 中

村猪八 掌儀 中村覚蔵 祝 山本源中 司尊 太田七右衛門 助洗 高橋中次郎 執事 安西文長 稲葉恒治

明和四年（一七六七）、蟹が阿波へ行っているとき、吉田が祭主を務めていることから、門人たちのなかで師に継ぐ立場にあったことが分かる。また祝を務めた山本彦中（伊勢櫛田の人、養蘭堂）も中下明倫堂での積業儀に先生学弟として参加している。山本彦中（源中、尚于）は中村習齋に香川修庵の医学を教えていた。山本は山本荷兮（一六四八〜一七一六、周知、檀木堂）の息子で、兄の山本寛齋（諱は格安武平<sup>17</sup>）とともに蟹の門人となり、親しく蟹と交友をしていた<sup>18</sup>。右の門人では高橋尚卿（中次郎、長善堂）・山田広胖（責善堂）なども医者である。右の中村猪八は中村習齋、中村覚蔵は中村厚齋（政峰）のことである。これらの門人については国会図書館所蔵『闇齋先生行状図解』（細野要齋 著 小寺広路 画）の巻末に載せられた養齋門人系図と一致する。中村習齋の家塾講会記録である『習齋先生家塾甲乙記』（鶴舞中央図書館所蔵、『愛知県教育史』資料編近世二所収）をみると、吉田嘉幹は中村習齋の私塾で容儀を教え、講義を行っている。恭齋の息子・嘉篤（専治）も養齋門人であったが、吉田恭齋が中村習齋の家塾に関わることで、習齋家塾に養齋門下が集まってくることになったようだ<sup>19</sup>。

### ③ 中村習齋

中村習齋（一七一九〜一七九九）は二十五歳の夏に、初めて蟹養齋と会った。寛保四年（一七四四）二月八日、その業績を認められ、蟹養齋と須賀精齋とともに藩から五人扶持を給され、子弟の教育に励むことを命ぜられた。門人となったのは寛保三年（一七四三）である。寛延二年（一七四九）六月、蟹は中村習齋のために「習齋記」を記し齋号を授け、九月十日の新堂開講儀には元文三年に亡くなった天木時中や築瀬寒松<sup>20</sup>の位牌も入れて行った。

明倫堂時代の蟹と習齋の問答では、例えば宝暦元年九月の「論語説」（『道学資講』巻一六五）に次のような問答

がある。「学而第一章亦た説しからずやの亦の字の語意は如何」という養齋の問いに対して、習齋が「和語テ面白  
フモアルマイカノト云フトナ語意モトウシマイト云ハ亦ノ字」と答え、養齋が「然」と答えている。習齋は学問以  
外にも、明倫堂に学ぶ養齋の長男・源藏（布施近知）の面倒も見ており、『習齋先生文集』には「近ごろ聞く源藏  
布施君、数しば鬪争の言有り、戯れに賦して以て呈す」と題し、「傳え聞く昨夜庭除に鬪うと、何事も水と魚とに  
如かず、朋友本来謙讓を重んず。願思わくば忍の字を百余も書かんことを」と詠んでいる。

宝曆四年（一七五四）、蟹は七月に「非新学」を発表し、十月尾張を去る。その時、師弟は歌を交わして別れた。  
蟹は「去本国之日留別」と題し、「十年の白髮国恩は深く、也た弄琴の我が音を知る有り、是れ胸中に古国を忘る  
るにあらざ、由来出処は天心に属す」と詠んだ。習齋は「吾師去国之日留別」と題し「弟子十年恩沢深し、弄琴差  
いて未だ清音を嗣がず、西関を出で去らば望むも及ぶ無く、閉却す平生一片の心」と応じて、師の警咳に接するこ  
と十年の思いを詠んでいる。さらに「後來誰と与にか舞雩に歌わん、天意今朝 我を若何せん、頼に郷党に在り同  
志の客、世上俗漢多きに從他す」と詠み、「俗漢」と誰かを誹っている。徂徠派の宮田敏『円陵隨筆』には養齋が  
思ひのほか早くに尾張を去らねばならなかったのには何らかの排斥があったのではと記述が載せられている。

布施養齋、俗称ヲ佐左衛門ト云、嘗テ明倫堂に出テ闇齋氏の大和小学ヲ講ゼシトキ、鈴木某ト云者、狂歌ヲ作  
リテ評シテ曰、

布施佐左か山又山かやますしてこりすもまた大和小学

尾張某ト云者、答歌シテ曰ク、

山の又山は山崎流ニシテ仁者ハ山ヲコノムトソキク<sup>21</sup>

と「知者は水を楽しみ仁者は山を楽しむ」（『論語』雍也）を踏まえて皮肉られている。『習齋先生家塾甲乙記』を

見ると、『小学』や『近思録』に加えて、明和六年には『倭小学』『聖学図』『講学鞭策録』を講じている。それまでは『靖献遺言』の講釈は全くないのに、明和七年（一七七〇）だけ一年間に五十回も講釈しており、何か理由があったように思われる。明和三年（一七六六）江戸幕府が尊王論者の山県大弐らを謀反の疑いで捕らえた所謂明和事件が起こった。蟹養斎は回想して「靖献遺言講義」（秋山文庫所蔵『続崎門経義輯編』所収）で、次の様に言う。

只綱齋ノ口真似ヲシテ大義大義ト呼ルルマデニテ性根ノスワラヌ綱齋学ナリ：若林氏・山本氏ホドノ力ナキ諸生ハ氣ツカナンダホドノコト夫テサヘ式部ナドガ辨舌ニテ悪ク言ウマワシテ咎ニアイ、京都デハ遺言ノ講釈ナリニクキ様ニナリタリ必竟イイマワシノ悪キユエナリ尾州ニテ小出治平ナドハ能クココヲノミ込ミ居タレドモ随分世ニサワラヌヨウニ大義ノ内ノ次ナル所ノ用ニ立ル書ノヨウニト氣ヲカレタコト成程ソレデ氣ツカイハ無レドモ綱齋ノ正意ノヒカタキナリ。中村惕齋ハ綱齋ト一意ニテ結句コレハ文字デハキトソノ旨ヲ論ジタルモ残リヲレドモ門下ノ人が強テ言イハラヌハコレモ妄二人ニハ語ラレナンタルユエナルベシ

「式部」とは竹内式部のこと、彼が『靖献遺言』を公家に講義し幕府によって弾圧された宝曆事件（一七五八）を指す。蟹養斎は若林強斎・山本復斎などを挙げて、小出治平（侗齋）は世間を刺激しないよう相当気を遣ってやっていたと捉えていた。中村習齋『講会諸友姓名記録』（鶴舞図書館所蔵）の分析で高木靖文が指摘するように、中村習齋の私塾には先述した吉田恭斎だけでなく、養斎の娘婿・遠山寛斎の門人たちも参加していた。習齋は安永七年から九年まで江戸在勤になるが、その間に遠山寛斎の息子・景定が輪講を担当したり、講釈をしたりしている。明和八年九月、蟹は大坂油町に移り、安永元年には大坂南本町に住み、『浪華郷友録』安永四年（一七七三）版には養斎の名前が見える。その後、大坂の菅田町に住み、凡そ六年間ほど大坂で暮らしていた。明和八年、中村習齋は『常経八書説』を編み、仲が良い遠山寛斎（養斎娘婿）に託して蟹に訂正を乞う<sup>22</sup>。蟹はその返事である訂説

に次の様にいう。

山崎佐藤淺見ノ著述ヲ本文ト見、ソノ脚註ニ論孟五經ヲモ立テルコト、隋分眼力聖人ニ近キホドニナクテハ、イイハリ難キコトカ、コレニヨツテ下拙ハ貴論ヲヨキトモアシキトイエドモ、得返答はイイヘズ、唯貴丈再考ノ便ニモトサシカカリタル疑ヲノブルコト如左

このように門人とは通信教育で添削を行っていた。この後、習齋は明和九年壬辰（一七七二）「壬辰ノ秋津島ニ遊シテ市川平治（名重敬）ト語リテ八書ノ説ノ事ニ及フ、市川コレヲ見セヨト言ヘリ、ヨツテ鄙説并師ノ訂説、及遠山ノ論ト皆コレヲ封送ス」と記し、門人たちは師の教えを書き写しながら学んでいたことを伝えている。習齋の『吾郷』には「道統図説附録師訓書要」と題して、自分が養斎より授かった著書の提要が全五十八篇記してあるが、それらはこうした師弟の交流によってできたものがある。こうして中村習齋の私塾は崎門文献の集積センター的な役割を果たすことになった。

#### ④ 宮沢欽齋

宝暦四年（一七五四）、蟹は磯野員純の三男・宮沢欽齋（磯埜昌字）のために「南溟説」を書く。その二年後、蟹は彼に欽齋という齋号を与えた。宮沢欽齋はもともと中村習齋の門人で、蟹が尾張を去った後付き従った。桑名で教学し、その後長島藩増山正賢に仕え、その後安永四年まで桑名に住み、尾張藩家老の志水忠喬に聘せられた。宮沢欽齋は養斎没後、養斎の文集（『養斎先生文集』）を編み、養斎の著作を伝えた功労者である。蟹が彼の号として「南溟」と贈ったのは、その年（宝暦四年）の春に林希逸『莊子口義』を読んだからである。彼は五十歳にして初めて『莊子口義』を読み、「読莊子口義」を記している。

予莊子を読み、其の議論の卑陋、見識の狭劣を怪しむ。而れども高才の士、之を賞すこと已まざるなり。因り

て疑する所を記し、既に此に至る。又た以為らく、此亦た閑言語なり、何の暇ありてか筆墨を費やさんや。遂に棄てて復た弁難せず、夫の莊子世の教を棄て、自ら好しとするものに甘んじて、此の數篇を作し、人をして其の見る所を知らしむるは何ぞや。自ら好しとせば則ち自ら好くして可なり。而れども拘拘としてその見る所を人に推さんと欲するは、則ち天性民彝の得て已むべからざるもの存する有り。此の篇を觀て而る後に亦た以て吾が教の尊きを知るべし<sup>23</sup>

そして「南溟說」では「大鵬 扶搖に搏ち、南溟を窺う、此れ莊周の寓言、以て人に大志有るを譬う。然れども其の譬うる所、徒らに窺溟渾黙を取り、海の海たるは則ち知らざるなり。：磯野生久しく我と遊び、我れ其の志の吾道に有るを觀て、因りて之を南溟と呼ぶ、人をして溟の溟たるを知らしめんと欲すればなり<sup>24</sup>」という。蟹自身の号も「東溟」つまり「東の海」である。宝曆六年（一七五六）、次男冬藏（貞、布施近勇、竹治）二十歳のとき、反故紙の中から偶然「寓言」という徂徠批判をした筆写書を入手した<sup>25</sup>、その中に徂徠に言及するものが多かった。父に聞けば、その「寓言」は、父・養斎が暑氣払いに『莊子』を読みその文体に倣つて書いた著作であつた。中村習齋は『読寓言』を記し、養斎の『寓言』の注釈をして、次の様に言う。

世の師たる者 雜書を講じ以て謀を備うる者亦た之れ有り。天木氏曰く、雜書を講ずれば則ち人の才を傷うなり。僕不肖なりと雖ども、諸君の才を傷うを欲せざるなり。故に未だ嘗て雜書を講ぜず。此の書や亦た雜に似たりと雖ども、而れども毎条必ず一議論を寓して以て正教を離れず。諸君徒らに奇を記し以て真を遺るること勿れと云う<sup>26</sup>

江戸中期には林希逸註の『莊子』が流行し、俳諧の世界では寓言による作詩活動があつた<sup>27</sup>。養斎のものは『莊子』寓言の虚と実の構造を仏教・徂徠・仁齋と俗学など当てはめた漢文学で、俳諧的な嗜好を凝らしたものと全く

異なる。引用文中の天木時中の言葉が示すように『莊子』を雑書としていた崎門において『寓言』は非常に異質な作品であり、このような著作を著した蟹養斎という人間を表しているとも言える。『寓言』の一節には次の様にある。

張子良 家貧しく、一妻一妾あり。將に祭らんとするに、妻妾皆疾ありて、子良炊ぐ。諸を妾に問う。妻曰く、誰れか良人 能く理を窮むと言う、炊くことすら猶お知らざるなり、と。子良憮然として少問して曰く、婦には長舌惟災の階あり、と。妻曰く、子蓋し自らを責むるも我を責むる也、と。子良曰く、夫れ窮なる者、其の当に知るべき所を知りて之を知り、其の必ずしも知るべからざるを知りて必ずしも知らず、此れを窮と謂う。耕は吾 諸れを農に問うを知り、炊は吾 諸れを婢に聞くを知る、窮にあらずして何ぞや。彼曰く、三年竹に對して理を窮む、曰く、一物を知らざるを恥愚となすなり、と。豈に伊洛の説くものを知らんや<sup>28</sup>。

習齋『読寓言』の註によれば、張子良は陽明学の学問のことで、「三年対竹」が王陽明、「一物不知」が俗学を比喻するという。『寓言』は、仁齋・徂徠への批判と仏教批判や通俗的葬儀の誤りを比喻する内容など、闇齋派の思想を何かに譬えた例え話集である。習齋の家塾講会記録『習齋先生家塾甲乙記』（明和四年<sup>29</sup>）をみると、この『寓言』の会読しており、『小学』『家礼』『近思録』と同様に、一年に三回も違う塾生（海部、久世、宇都宮）に読ませている。中村習齋『量課功』（大倉山精神文化研究所蔵、安永八年）には初学者が筆写すべき書目とその筆写枚数および日月が示してあるが、ここに「郭注莊子、服序、目錄 凡そ二百八十八枚」とある。中村習齋が基本書の中に『莊子』を入れるのは、蟹の『寓言』を起因としており、闇齋派の中では極めて異例で、江戸の『莊子』研究では言及されていない新事実として指摘しておきたい。

#### 四、交友―南川維遷

宝暦四年（一七五四）十月、蟹は尾張を去ってから桑名に行った。『養斎先生文集』「寄南川維遷」には次の様にある。

僕尾張に之きて此郷に來たるなり、唯だ問字の客たるのみ。遍ねく英才有るも、亦た唯だ自負自安して、友の道を以て交わるべき者鮮なし。足下の山中に在りしとき、嘗て豪傑の士たるを聞き、而して窃かに独り歆慕す。

其の來たりて此の郷に住むに及びて、僕の柴扉を叩けば、則ち欣欣然として、榻より下りて談す<sup>30</sup>。

手紙の宛先である南川維遷（金溪、一七三二〜一七八一）とは菰野藩儒で、医業で生活をしてきた人物である。彼が桑名にいたのは宝暦四年（南川二三歳頃、蟹五十歳）から明和四年までで、親子ほども歳の違う二人が親しく付き合いを始めた。南川維遷は京都・堀元厚に入門し医業を学び、また那波魯堂から朝鮮語を教わり、宝暦十三年の第十一回目の朝鮮通信使の來朝に際しては、大坂へ出向いて交流をした。維遷はその朝鮮通信使との交流をもとに書いた『金溪雜話』の内容から通信使との交流場面と内容を削除して再編集したものを『閑散余録』と題して刊行した。『閑散余録』緒言で南川が「余嘗て桑名に寓居すること十年計り読書の暇金溪雜話三卷を草す」と言い、南川と蟹は桑名でほぼ同時期に私塾を開いていた。その『閑散余録』の中に「三宅氏ノ伝ハ述作ノ祭祀來格説ノ初メニ山宮官兵衛ガ撰セル小伝アリ然レドモ此度ノ始末ハ諱テ載ザルユエコニ詳ニス予ガ記スル處ハ三宅氏カ門人蟹佐左衛門カ話ヲマノアタリ聞及ヘリ」とある。延享四年（一七四七）に上梓した三宅の『祭祀來格説』は、宝暦十三年（一七六三）に天木と蟹の後序を附して重訂され、大坂の藤屋勘兵衛（松庵藏）から再刊された。これは宝

暦年間に、彼ら二人が直接話をしていたことを証左するものである。

宝暦十年庚辰（一七六〇年、蟹五六歳）孟春、「再寄南川維遷」には数か月も維遷からの音信が絶え、蟹は焦らされる気持ちに率直に述べる<sup>31</sup>。同年十二月の「復南川維遷」で、はじめに「嚮者に自ら揆らず、数千百言、江海の量を奉呈す」とあり、この前の手紙がかなりの分量であったことに触れ、次の様に言う。

来書に曰く、業を龍崎先生より受け、此の時十五六、首に小学四書近思録を授けられ、大義に粗通し、程朱を信ずること甚し。十八九に及びて、仁齋家の書を得て、熟読すること数過、此れ未だ全く仁齋を信ぜざれど、程朱も亦た訛謬あるを悟るなり云々。不佞窃かに謂えらく、程朱の説、実に孔子の意を得て、以て孔子の教を伝う、…（略）足下 幼くして龍崎先生の教を受け、未だ能く尽く先生の教を究めず、大義に粗通して止め、仁齋徂徠の書を熟読し、之に彫蠱の技を加え、先生の尚ぶ所に専心せず、疑を師友に質さず、遽かに自ら惑う所を以て是当と為し、遂に自己の見を立て、轅を北にして越に往き、唯だ疾駆せざるかと之れ憂う。是れ豈に孔門の士の為す所ならんや。不佞 嘗て聞く、先生往年にして仁齋の説を喜び、然り而して去歲 先生と語れば、則ち一に程朱の訓を信じ、且つ不佞の著わす所の一編を献ずれば、則ち喜びて之を称す、先生豈に巧言令色ならんや<sup>32</sup>。

南川の師である龍崎致齋<sup>33</sup>は朱子学を学びながらも、伊藤東涯の門下に転向した儒者である。維遷は宝暦八年に父を亡くし、喪中にあつた時のまさに宝暦九年、蟹は孤野に住む龍崎のもとへ行き、自著まで献呈して話してきたという。龍崎は元禄二年（一六八九）生まれだから当時七十歳を超えていたはずである。この話は蟹の行動的な性格と彼の学問的在り方を示すものである。また維遷は当時、竜草廬の幽蘭社で修辞に熱中しており、それを「加之彫蠱之技」と蟹に説教されたことになる。この点に関して南川維遷研究の権威である岩田隆の研究<sup>34</sup>では全く

指摘がなく、桑名時代の維遷を知る重要な資料だと言えよう。さらに今後の課題として、南川維遷以外の桑名儒者たちと蟹との間にどのような交流があったのか、調査すべきであることを指摘しておきたい。

## 五、やういじ

蟹は明和八年九月から六年ほど次男と大坂におり、蟹が大坂を去る直前、尾藤は「與蟹養齋」(『流水居文稿』所収)を記した。その頃、蟹は伊勢へ向かっていた。神宮文庫所蔵『非徂徠字』(刊本、林崎文庫)には、表紙に「安永五年尾張蟹佐左衛門維安 奉納」と墨書があり、彼がみづから伊勢神宮に奉納したことがわかる。「安永五年」即ち蟹が七十二歳の時のことである。恐らくこの後に彼は再び大坂へ行き、『辨復古』(続日本儒林叢書 第二冊収録)を出版した。版元は大坂吉文字屋市兵衛、安永六年(一七七七)十月二十七日の出版である。同年、中村習齋は藩より月俸を得て二年間江戸藩邸で講義をした。この年、中村習齋は五人扶持が給せられたが、その際に提出した文書には学問の師を「浪人・蟹佐左衛門」「三十五年以來執行仕候」と記している。

安永七年(一七七八)八月十四日、蟹養齋は伊勢浦田で亡くなった。しかし彼の墓所はなく、藤浪神主山に葬ったという。生前あれだけ『家礼』を説きながら、自分の家を継ぐ人がいなかったのである。実は蟹養齋自身も養子である。阿波の生まれで、尾張竹腰氏の家臣布施平右衛門正次<sup>36</sup>の養子となり、布施姓を名乗っていた。布施姓から蟹姓に戻したのも『氏族辨正』の影響と思われるが、長男源蔵も桑名藩の仕臣佐々家へ養子に出て(佐々木齋)、次男も筱宗介(布施竹治・近勇)を名乗り、布施姓を継いでいない。『士林泝洄』に「布施佐左衛門妻離別後、布施喜左衛門養之」とあり、彼は何時かわからないが離婚もしていた。

以上のように、本稿で示したのは蟹養斎の周辺からみた養斎像であり、これらは先行研究では指摘のないところである。筆者の真の問題意識は、中村得斎がまとめた崎門文献叢書『道学資講』の原資料が如何に生成されたのかというところにあり、今回はそれに対する調査を通して垣間見えた人間関係の一端を紹介するにとどめた。蟹の著作の検討は稿を改めて論じたい。

- 1 「蟹養斎教授法の一考察」、『新潟大学教育学部紀要』（人文・社会科学編）第二六号（二）、一九八五年、四八八〜四八〇頁。
- 2 「蟹養斎における『小学』理解から見た初学教育への視線」、『道徳と教育』第五九号、二〇一五年、三〜一五頁。
- 3 「『道学資講』における『律呂新書』研究」、関西大学中国文学会紀要』第三五号、二〇一四年、六三〜八三頁。
- 4 「蟹養斎における儒礼論・『家礼』の喪祭儀礼をめぐる」、『日本思想史学』第四七号、二〇一五年一四四〜一六一頁。
- 5 小島康敬「増補版」『徂徠学と反徂徠』ぺりかん社、一九九四年。
- 6 岸野俊彦「尾張藩社会の文化・情報・学問」清文社、二〇〇二年。
- 7 「予少有周易僻、弱冠聞尚斎先生承山崎子之統、負笈西遊受業其門、経傳子史莫不徧聽而周易一部最勵力以聞」。
- 8 「享保十年丙午秋、於恭庵柳川氏得唐本朱氏語類。因正刊本云、刊本者万曆板、彭葉朱汪四序皆備焉而衍文誤字什而二三、唐本唯有彭序及無名氏序、其中曰、成化癸巳江西藩司重刊語類。以是觀之、疑成化板也。比之刊本善者過半、不善者少。今取刊本考以唐本。其例凡、又作某者、以字通也。一作某者、以義通也。加以恕是者、以得也。加以恕非者、以失也。加以誤者、以訛文也。其間有个作個、他作它類、此皆略字、故不悉記。又四子六經部取大全書、周易集成書以考訂之、若夫序次混雜、范而難弁者、別為次第、提書其上、八月始功東溟次重」。

- 9 「古厓宮先生、与予同里、嘗携家族、移居於京、既而歸。今茲之春又移于京、皆有義在云、君子人歟、君子人也。予之於宮先生、父事之、於其長子順平君、肩隨之、聞旅裝已成、送之于路、拳觴以祝宮先生、畢又語順平君曰、於戲、吾友願聞吾語、居移氣養移体。夫京師天下之中、帝王之都、大人先生居焉、歌為雅、形為礼、子之遷不亦樂乎。而子之而傲冉有氏、夏之季、秋之初、可往子之居、訪子之廬。予欲刮目而見於子、子亦当叩兩端以語予、於是乎書、享保甲寅三月朔」。
- 10 『猿樂論』については羽塚啓明「養齋の日本樂説」を参照。
- 11 『恭軒先生門人牒』には小出侗齋・須賀精齋・須賀亮齋の名がある
- 12 『養齋先生文類』
- 13 『養齋先生文集』
- 14 磯野員純は『革命説』（『国学辨義』巻四七、寛保二年壬戌（一七四二）も著す。
- 15 『養齋先生文集』
- 16 『名古屋叢書』第一巻所収『寛延記草』、二八四～二八五頁。
- 17 山本格安『星名考』の序文を蟹が記している。
- 18 『尾張先民伝』山本荷兮の条を参照。格安が儒者になるといつて源仲に反対された際、「養齋之を止めていはく 貧富天にあれば 儒必しも貧ならず 醫必しも富ならざれば 儒と成に如かず」と言ったことが記してある。
- 19 高木靖文「中村習齋「講会諸友姓名記録」にみる私塾像」、『名大医短紀要』第六号、一九九四年を参照。
- 20 小出侗齋に従学し、後に浅見の門に遊学し、大月正義の講義を受けた。
- 21 『名古屋市史』学芸篇、二四頁、一九一九年
- 22 「蕃常経八書説を作これを遠山寛齋氏に託して訂削を師に乞う 師すなわち訂説をたまう 翌年二月到る時に 先生大坂に在り」（『道学資講』所収）
- 23 「予読莊子、怪其議論卑陋、見識狭劣、而高才之士、賞之不已也。因記所疑、既至于此、又以為此亦閑言語、何暇費筆墨邪。

遂棄而不復弁難。夫莊子棄世教、甘自好、而作此數篇、使人知其所見者、何邪。自好則自好而可也、而拘拘欲推其所見於人者、則天性民彝、有不可得而已者而存焉、觀於此篇、而後亦可以知吾教之尊矣」

24 「大鵬搏扶搖、窺南溟、此莊周之寓言、以譬人大志、然其所譬、徒取竊溟渾默、於海之為海則弗知也。…磯野生久与我遊、我觀其有志於吾道、因呼之南溟、欲使人知溟之為溟」。

25 「貞暇日探反故堆、得寓言一冊、其中多辨徂徠子、不知誰作、問請家大人則曰、噫、吾著也。夏日消暑、讀南華篇、其言或託之古人、或設為無実姓名、以論諸子百家、吾偶然倣其体、文則我豈敢、吾唯言志而已」。(『道学資講』卷九十八所収)

26 「世之為師者、講雜書以備謀者亦有之。天木氏曰、講雜書則傷人之才也。僕雖不肖不欲傷諸君之才也。故未嘗講雜書焉。此書也亦雖似雜、而每條必寓一議論以不離正教、諸君勿徒記奇以遺真也」。

27 例えば中野三敏「寓言論の展開」(『戯作研究』昭和五六年、所収)、川平敏文「寓言」(『江戸文学』第三四号所収)、同「俳諧寓言説の再検討」特に林注莊子の意義」(『文学』五・六号所収)などがある。

28 「張子良家貧、有一妻一妾。將祭、妻妾皆疾、子良炊、問諸妾。妻曰、誰言良人能窮理、炊猶不知也。子良慙然、少間曰、婦有長舌惟災之階。妻曰、子蓋自責而責我也。子良曰、夫窮也者、知其所当知而知之、知其不可必知而不必知、此之謂窮。耕吾知問諸農、炊吾知問諸婢、非窮而何也。彼曰、三年对竹窮理、曰、一物不知為恥愚矣。豈知伊洛之說者哉」

29 「愛知県教育史」資料編近世二、五〇～五二頁。

30 「僕之尾張而來此郷也、唯問字之客而已。遍有英才、亦唯自負自安、可以友道交者鮮矣。足下之在山中、嘗聞為豪傑之士、而窃独歆慕焉、及其來住此郷、扣僕柴扉、則欣欣然、下榻而談」。

31 「足下与僕、相識日久、嚮奉尺簡、以訪足下之志、既數閱月矣、足下之学、豈無所志哉、而未对也、足下之才、豈言志之苦於下筆哉、而未对也、足下時与僕相見、清談時移、則非以僕為不足取也、而未答也、但足下雖与僕相交、而意実為不足取歟、則足下何待僕之無情也、足下蓋不如此也」。

32 「來書曰、受業於龍崎先生、此時十五六、首授小学四書近思録、粗通大義、信程朱甚矣。及十八九、得仁齋家之書、熟読

教過、此未全信仁齋、而程朱亦悟有訛謬也。及十八九、得仁齋家之書、熟誦教過、此全信仁齋、而程朱亦悟有訛謬也、云々。不佞窃謂、程朱之説、實得孔子之意、以伝孔子之教、…(略) 足下幼受龍崎先生之教、未能尽究先生之教、粗通大義而止、熟誦仁齋徂徠之書、加之彫蠱之技、不專心於先生所尚、不質疑於師友、遽以自所惑為是當、遂立自己之見、北轅而往越、唯不疾驅之憂、是豈孔門之士之所為哉。不佞嘗聞、先生往年喜仁齋之説、然而去歲与先生語、則一信程朱之訓、且猷不佞所著一編、則喜而称之、先生豈巧言令色哉。

33 浅野儀史『三重先賢伝』(玄玄莊、昭和六年刊) 一四八頁参照。

34 岩田隆「南川維遷伝の研究——儒者の生涯」『名古屋大学国語国文学』第二九号、一九七一年、一三三—一四八頁。また『日本近世民衆教育史研究』第四章「伊勢国の文人南川金溪の研究」を参照。

35 『名古屋叢書』第二五冊『芳躅集』、一三三頁に「布施維安之墓 撰津国大坂東高津 宝樹寺 本源院養室日嚴 安永三  
甲午五月廿七日」とあるが、死亡年月が一致せず、事実と齟齬する部分が多く、疑わしい。

36 『名古屋叢書三編』第十二冊『諸家雑談』三〇三頁に「養齋先生幼にして養育をうけらるる布施氏は、尾藩御本丸番の家なりと云。此家今在りや、未詳。中村得齋翁の話」とある。また布施氏については『三百家臣人名辞典』二五一頁を参照。